



2023年

4月第1・2・3週の主日礼拝説教要約

・4月 2日：ヨハネ福音書 12：12 - 19 .

『 子驢馬の背に揺られて 』

・4月 9日：ヨハネ福音書 20：1 - 10 .
(11 - 23)

『 イエスは何処へ 』

・4月16日：ヨハネ福音書 20：24 - 29 .

『 私は見ていない 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 子驢馬の背に揺られて 》

ユーフラテス川のほとりの町ペトルに住んでいた神の人、預言者バラムは、主なる神の意向に従い、モアブの王バラク of 招聘を再三断りましたが、王の家臣の執拗な要請を固辞するのも憚られて、ある朝、重い腰を上げて、雌驢馬の背にまたがりモアブに向けて出立します。ところが雌驢馬が歩き始めた途端、主の使いが行く手に立ちはだかります。バラムの目には何も見えませんから、彼は雌驢馬の腰を打って前進を試みます。ところが雌驢馬は地面にうずくまります。すると、不思議なことには人間と驢馬との押し問答がはじまります。見るに見かねて主の使いがとうとう姿を現し、バラムの暴挙を糾弾したのです。驢馬には人間には見えないものや理解し難い不思議なものを察知する能力があるのだそうです。(民数記22章)

さて、今日の福音書に出てくる驢馬は生まれてこの方、まだ誰も背中に乗せたことのない子驢馬です。本来なら調教しなければなりません。けれども、その日、子驢馬は何の抵抗もなくイエスを背中に乗せると歩き始めたのです。古の雌驢馬と同様に、驢馬には神やその使いの意志を察知する能力が備わっていたのです。こうしてゼカリヤ書の預言が注目されます。

あなたの王があなたのところに来る。彼は正しき者であって、勝利を得る者。へりくだって、驢馬に乗って来る、雌驢馬の子、子驢馬に乗って。
(ゼカリヤ書9:9c以下)

“あなたの王”の風情を漂わせたナザレのイエスは、子驢馬の背に揺られて、エルサレムに入城します。

ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。イスラエルの王に。

会堂で詠い慣れた詩篇の歌詞(118:26)が、読みなれたゼカリヤ書の言葉とともに、エルサレムの民衆の心の中から溢れ出てきました。

教団讚美歌1編129(21-309)・130番は、その時の光景を歌にしたものです。130番は、なぜか大相撲の表彰式にも使用されます。

《 イエスは何処へ 》 《 私は見ていない 》

あなたがたが私を呼び、来て私に祈るならば、私は聞く。私を捜し求めるならば見出し、心を尽くして私を尋ね求めるならば、私は見出される。
(エレミヤ書29:12-14a)

古代、ユダの地に残留した預言者エレミヤが、バビロニアに連れ去られたユダヤ人の支配階層や王侯貴族に宛てた手紙の中の一節です。“私”とは、“主なる神”ご自身のことです。信仰は神を見出し、不信仰は神を遠ざける。このことを人間に悟らせるのが預言者の使命です。心を尽くし神を探し、尋ね求める者の前に、神は惜しみなくその姿を現される、ということ。

全ての造り主である神は、ご自身の被造物である人間に、何ら遠慮する必要はありません。むしろ、人間が一方的に不信仰に陥り、神の前から逃げ回っている、これがアダムとイブにはじまる“失樂園症候群”であり、人類は生得的にこれを保有しています。

さて、神から“逃げ回る”という人類(特有?)の罪に相反して、心を尽くして主イエスを、葬られた墓の中にまで尋ね求めた人がいます。四福音書に記載された複数の証人の中で例外なくその名が記されているのはマグダラのマリアだけです。当局者の追跡を恐れて隠れ家に潜む弟子たちをよそに、マリアは(香油をイエスに塗るために)、葬られて三日目の日曜日の早朝、イエスの眠る墓へと急ぎます。イエスの受難と復活にまつわる最も多くの情報を確保しているヨハネ福音書は、最初に墓へと向かったのは複数の女性たちではなくマリアの単独行動であったことを明かします。

かつて、「あなたはメシア(キリスト)です」とイエスに向かって告白をしたペトロ、これに異存のなかった弟子たちの信じた相手こそ、飲食を共にし、最後は十字架にかかり、血を流し、死に絶えた「神の子」でした。彼らの目で見えたメシアとは、何の抵抗もせず、極限までこの世に生きた神の子キリストでしたが、(メシアとは)それ以上でも以下でもなかった。

イエスの死後、弟子たちに強いられた潜伏期間はいつまで続くのでしょうか。この沈黙を破る報せが、彼らの隠れ家に届きます。その場所が難なく辿り着ける場所だったのか、どれほどの時間がかかったのか、福音書はそ

のことには触れません。一報を受けた弟子たちは少人数で、ひそかに現地に向かいますが、一行の中にトマスの姿はありません。彼らは通報者のマリアと共に、イエスの墓が空であることを確認しますが、復活したイエスとの再会を果たせぬまま、マリアを現地におき去りにして、隠れ家に戻りました。彼女は独り、墓の前で泣き崩れ、もうなす術もありません。

すると後方から語りかける声がします、「なぜ泣くのか」と最初に彼女に問うたのは、天使でした。彼女は目的の人の体が墓から持ち去られたことを天使に告げます。するとさらに後方からもう一人、彼女に同じ質問をする声が聞こえます。「女よ、なぜ泣くのか」と。マリアは答えます、体がどこに持ち去られたのか知っていたら教えてくれと。すると、天使ではない方の人物が答えます、「マリア」。彼女は意気消沈しており、その声の主が誰なのかに気が付くのに、少しだけ時間がかかります。しかし、次の瞬間、ここで歴史的な再会を果たされたのです。イエスとマリアの二人だけの再会は唯一、ヨハネ福音書に記載があります。

その後、弟子たちが、どのタイミングで復活のイエスと再会を果たしたのか、統一見解はありません。ただその時、イエスが隠れ家に現れて弟子たちに向かってかけた言葉が、「あなたがたに平和があるように」というものだったことが、複数の福音書に記されています。

さて、イスカリオテのユダが脱落して11人となっていた弟子たちの中で、その時、唯一人、再会を果たせなかった弟子がいます、トマスです。他の10人の弟子たちが、復活のイエスから言葉と聖霊とを受けていた時に（ヨハネ福音書20:20）、彼は不在だったのです。トマスもイエスの死をどこかで見届けています。さらに、死人の復活などありえないと言い張ります。彼は、十字架のイエスの「手に釘の痕があり、脇に深い刺し傷があり」絶命していたことを克明に知っていたのでした。他ならぬイエス自身も、そんな彼のことはご存じです。

さて、隠れ家の戸は八日後も嚴重に施錠されたままでしたが、そこにイエスが入って来ます、「あなたがたに平和があるように（二度目）」。「あなたがた」は一人増えて11人となっています。トマスは驚愕しました。

イエスはトマスに語りかけます、「私の手を見たか、今度はあなたの手を私の脇腹に入れてみなさい」。その時、トマスが叫んだ言葉は、イエスの復活後の、弟子の最後の信仰告白となります。「私の主、私の神よ」。